

市制70周年を機に促進する次世代育成と元氣創造 持続可能な未来の基盤はNEO・海のまちづくり

地域振興の原点に帰って描く
「海のまち」としての近未来

全国平均を大幅に上回る山地率(89%)や、黒潮洗う太平洋に直面する総延長700km以上(土佐湾など)の海岸線などが醸し出す高知県の自然条件は、実に多様だ。県都・

高知市の西方約37km、土佐湾のほぼ中央部に位置する海の



須崎市のイメージキャラクター「しんじょう君の誕生10周年」は盛大に祝われた(令和5年4月21日)



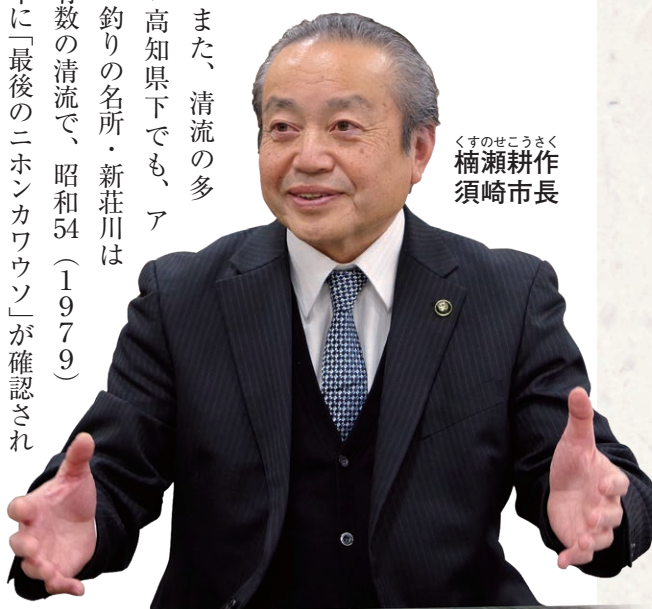
令和6年10月6日に華々しく開催された市制施行70周年記念式典

まち・須崎市の市域(総面積135・20km²)も、後背部にはやはり中山間地域が多い。そして、山間部から流れ来る新莊川、御手洗川、桜川、奥浦川などの流域が肥沃な農耕地を形成し、市街地は須崎湾口の周辺部に集中している。

農産品は水稻栽培とともに、年間を通じて温暖な気候と高度な栽培技術とが相まって実施される施設園芸や露地野菜、かんきつ類の生産に優れ、特にミョウガ、キュウリ、シシトウ、花卉類が名高い。

水産業は沿岸・近海漁業と養殖が盛んだ。全国的な傾向でもある沿岸・近海部の水質悪化と、付随する漁獲量の減少傾向は、高知県全域の近海や土佐湾沿岸部にも見られる。しかし、須崎市の海岸線は地形の入り組んだりアス式海岸を形成しており、巨大な土佐湾の一部を成す須崎湾・浦ノ内湾・野見湾など、個性の異なる湾岸部と近海を軸に、多彩な魚種が現在も水揚げされている。

くすのせこうさく
楠瀬耕作
須崎市長



また、清流の多い高知県下でも、アユ釣りの名所・新莊川は有数の清流で、昭和54(1979)年に「最後のニホンカワウソ」が確認された川としても有名だ。須崎市のマスコットキャラクター「しんじょう君」は、そのニホンカワウソをモチーフにしたもので、須崎市の豊かな自然環境のシンボルの存在ともなっている。

須崎市は昭和29(1954)年10月1日、旧高岡郡須崎町・多ノ郷村・浦ノ内村・吾桑村・上分村の1町4村による合併で市制施行。令和6年10月1日に市制施行70周年



高知県における鉄道建設史は「須崎駅（海のまち須崎駅）」から始まった



住友大阪セメント（須崎港）は須崎産石灰石から作るセメントを国内外に搬出している

の節目を迎えた（本年2月末現在の人口1万9136人）。

中心市街地を成す旧須崎町は、かつて重要港湾・須崎港の発展とともに大いに繁栄した。JR土讃線・須崎駅の成り立ちの歴史からもそれは分かる。瀬戸内側の多度津駅（香川県）から、高知駅や須崎駅を経由し、四万十町の窪川駅まで達する幹線鉄道・土讃線は、明治中期から昭和前半期に、香川県・徳島県・高知県で敷かれた各鉄道路線を連結させる形で建設され、全通までに約60年を要した。

この土讃線の建設に際し、大正13（1924）年、高知県内で初めて開通したのが、須崎駅（日下駅（高知県高岡郡日高村）を結ぶ路線・旧高知線だった。須崎駅はその起点駅と

しての栄光が今日まで語り伝えられ、須崎駅（令和3/2021年12月18日からは後述する『海のまちプロジェクト』に合わせ『海のまち須崎駅』としてリニューアル）の駅舎前には、実物大の蒸気機関車の動輪とともに「高知県国鉄発祥の地」と刻印された記念碑が設置されている。

さらに、高知県内の土讃線（旧高知線）の建設用資材は、須崎駅に直結する須崎港から陸揚げされた。須崎港は、優れた漁業基地であるとともに、昭和初期から急速に進んだ港湾整備事業を背景に、須崎産を中心とする県内産・石灰石の積出港としても、急速に発展する。須崎港の背後には日本一の石灰石鉱山（鳥形山）があり、須崎港から国内各地、アジア・オセアニア方面に搬出されているのだ。

昭和36（1961）年に大阪窯業セメント（現住友大阪セメント）の工場が操業を開始してからは、同工場で使用する石灰石の約70%が、須崎産で賄われるようになった。かくして須崎港は、セメントの生産・積出港として日本の高度経済成長の一翼を担い、昭和40（1965）年には重要港湾となり、昭和44（1969）年には国際貿易港への認可となる開港指定もなされ、現在に至っている。

「須崎港の発展とともに、旧須崎町は商業的にも大いに栄えていきます。

須崎駅から始まる商店街には、現在も、当時の繁栄の面影を色濃く残す建物がたくさんあります。しかし、高度経済成長時代の終焉と、その後の長期的な景気低迷時代が続くにつれ、人口減少も進み、商店街の人通りは年々少なくなる一方でした。

こうした状況を根本的に改善していくにはどうしたらいいのか。須崎市の発展の原点だった『海のまち』としての現代的な在り方をもう一度問い直し、抜本的な施策を粘り強く、計画的に実施していく必要があるのではないかと。そのように模索していた令和2（2020）年、高知信用金庫から、令和5（2023）年に創業100周年を迎えるに当たり、創業の地である須崎市の地域振興に貢



献していきたいという、非常にありがたい申し出を頂きました。

そこで令和2年9月に、まずは『ふるさとの未来貢献パートナー協定』を高知信用金庫と締結させていただきました。さらに、翌令和3年5月から協定に基づいて開始し、現在も力を傾注しているのが『海のまちプロジェクト』です」

そう語るのは楠瀬耕作須崎市長だ。昭和57（1982）年3月に大学を卒業後、民間企業に勤務。須崎市を拠点とするハイヤー会社の代表取締役を経て、須崎ケーブルテレビ株式会社（現よさこいケーブルネット株式会社）の設立メンバーとなる。さらに須崎市商工会議所副会頭などを歴任後、平成24（2012）年1月に実施された須崎市長選に出馬し当選。本年度4期14年目を迎えている。

海のまちプロジェクトの基本は 地域の人々の暮らし方改革

県都・高知市に本店を構え、四国の信用金庫の中でも最大の規模を誇る高知信用金庫は、大正12（1923）年1月25日、「須崎信用組合」として須崎市（旧須崎町）で創業した。大正12年は、土讃線の高知県での起点となる旧高知線・須崎駅の開業の前年だ。急速な発展を示し始めていた須崎港と、商業都市としての地歩を固めつつあった当時の須崎町に、地域企業や住民などの出資で地域振興を相互

扶助的に図る信用金庫が誕生するのは、ごく自然な流れだった。

「須崎港を軸に、旧須崎町だけでなく広範囲な周辺エリアの発展が見込まれる中で誕生した須崎信用組合は、実際、周辺地域全体の発展に不可欠な存在となりました。

須崎信用組合はやがて高知県全体、四国全体をエリアとする高知信用金庫に発展するわけですが、その高知信用金庫から創業地・須崎市との相互扶助的連携について、改めてお声がけいただくことになったキッカケは、私どもが『須崎市の指定金融機関になっただけじゃないか』と申し入れたことになりました。新たなまちづくりを模索していた須崎市では、指定金融機関を含め、全ての面での『見直し』を企図しており、ご縁の深い高知信用金庫との連携を深めることもその一つだったのです。しかし、逆にもっと踏み込んだ形で、創業地への地域貢献をしたいとお申し出を頂いたことは、私たちにとってまさに千載一遇の好機となりました」（楠瀬市長）



須崎駅に近い「城山公園津波緊急避難道」は、緑日商店街入口から徒歩5分の近さ。市民の南海トラフへの危機感強い



プログラミングやロボット工作など子どもたちが最新テクノロジーに触れられる「てくテックすさき」は10代の新たな居場所としても機能

また、地域振興を抜本的に捉え直し、持続可能な地域の未来を積極的に推進しようとする『海のまちプロジェクト』の開始は、多くの地域企業との絆をより深めるとともに、須崎市への進出を目指す企業との新たな関係性を結ぶ、大きなキッカケにもなりつつある。

「ただ、改めて『海のまち』の構築を目指すといっても、明治時代から続く殖産興業推進の渦中であって、須崎信用組合ができた100年前の『海のまち・須崎』の立ち位置と、現代における『海のまち・須崎』の目指すものは、おのずとまったく違ってきます。

当時と違って、現代はまず人口減少が不可避のトレンドになっています。そして、国全体の経済的發展以前に、最初の基盤となる個人個人の暮らし方の向上などが大きなテーマ

須崎市

(高知県)

市 政 ル ポ



須崎のメインストリート「川端シンボルロード」(堀川沿い)は春の桜並木、冬のイルミネーションなど市民と観光客の憩いのストリート

になりつつある現代に目指すべき『海のまち』とは、一体どのようなものなのか。

それは経済的な振興もさることながら、まずはその前提として、環境問題などを含め、地域の人々の暮らしがより豊かで幸せなものになっていくことに直結するまちづくり理念の構築と、着実に効果的な実践がセツトになっていなければならぬと考えております。

そして『海のまちプロジェクト』の推進を通じ、ぜひ実現しなければならぬのは、須崎市の未来を担う『次世代の育成』と、若者たちに地域で生きることを選んでもらうための就労の場の確保、その最大の原動力となるまちなかの『元氣創造』です(楠瀬市長)

こうして始まった『海のまちプロジェクト』は、「主催」須崎市、高知信用金庫／共催「高知県、信金中央金庫、高知大学、須崎総合高校／後援」高知新聞社、高知放送、テレビ高知、高知さんさんテレビ、J R 四国、J T B、奥四万十観光協議会、須崎商工会議所、須崎市観光協会」という、須崎市および高知県における、まさに産官学民・オール体制での取り組みとなった。

同プロジェクトが、令和3年度から5年間

の実施期間中に達成をまず目指したのは、施設面でいえば「ログスパークシーサイド高知須崎の整備(令和4/2022年4月開業済み)」「須崎魚市場の整備(本年2月竣工済み)」「海のまち図書館等複合施設の整備(令和9/2027年開館予定)」などだった。

さらに、J R 須崎駅を含む中心市街地を『海のまちコアゾーン』と位置付け、コアゾーンへのエントランス、シンボルロードや縁日商店街などの整備と、魚市場・図書館などを軸とするエリア整備も行い、中心市街地全体が一つのアトラクション・ゾーンとなるように再構築する事業も、現在並行して進められつつある。

NEO・海のまちを象徴 リアス式海岸とレトロなまち並み

始動から4年目に入った須崎市の『海のまちプロジェクト』。その多様な現況の一端を、現地取材させていただくべく、まず足を運んだのは浦ノ内湾だった。海のまち・須崎市における、海そのものに関する最大の特徴は、前述のようにリアス式海岸特有の複雑に入り組んだ海岸線がもたらす、波の穏やかな港湾と美しい景観だ。

特に土佐湾の中央部に位置する浦ノ内湾は、奥行きが12 km 以上もあるのに入口が狭く、非常に閉鎖的な地形を呈している。そのため、湾内の波は基本的に穏やかで、カヌー

など海辺のアクティビティを体験するにも最適な環境が整っている。須崎市ではこの浦ノ内湾の良好な環境を活用して、平成30(2018)年7月、高知県では初となる海上アスレチックやSUP、シーカヤックなどの海洋スポーツ体験プログラム「コモドウラノウチ」を立ち上げ、週末や季節休暇などの期間限定で毎年開催している。

「浦ノ内湾では波穏やかな環境を活用して、平成11(1999)年から『須崎市ドラゴンカヌー大会』を開催してきました。さらに平成13(2001)年には、市立スポーツセンター・カヌー場が完成。その結果として、地元の県立須崎総合高校にカヌー部が誕生



海上アスレチック、シーカヤック、ウォーターバルーン、SUPなど、本格的な海洋スポーツから海辺に親しむ遊びまでが揃うコモドウラノウチ



オープンウォータースイミングは波が穏やかで水質の良好な浦ノ内湾にぴったりの水泳競技だ

したほか、全国の大学チームや実業団チーム、さらには日本代表チームまでが合宿地として利用してくださるようになりました。

また、令和3年7月・8月に開催された東京オリンピックの際には、チェコ共和国のカヌー代表チームが須崎市のカヌー場で合宿を行い、カヌースプリント男子カヤックペア1000mで見事に銅メダルを獲得されました(楠瀬市長)

浦ノ内湾の市立スポーツセンター周辺は、海・川・湖などを舞台に開催されるオープンウォータースイミングにも好適だ。ここを会場に毎年10月には「すさきオープンウォータースイミング」大会が開催されており、国内外から有力選手たちが集う。(※コモドウラノウチなど浦ノ内湾で開催されるイベント・アクティビティなどは、NPO法人すさきスポーツクラブが指定管理者として担当)。

浦ノ内湾におけるこうした海洋スポーツおよびアクティビティの盛り上がりは、民間企業の進出にもつながっている。その代表格が、令和4年4月に開業した「ロゴスパークシー

サイド高知須崎」

(須崎市野外体験施設だ。指定管理者のロゴスコープレーションはアウトドア用品の製造販売だけでなく、近年、自治体との連携による地域スポーツの振興事業に乗り出しつつある。そして、須崎市の《海のまちプロジェクト》に呼応する形で、キャンプ場、ショップ、カフェ、バーベキュースタジアムなどからなる「ロゴスパークシーサイド高知須崎」の設置と運営に名乗りを上げることになった。

取材時(本年2月21日)は冬場の平日ということもあり、一般の利用客は少なかった。しかし、穏やかな天候の中、折しも、日本のカヌースプリントナショナルチームが合宿しており、練習風景を目の当たりにすることができたのは、願ってもない幸運だった。

海のまち須崎駅から始まる、中心市街地で展開中の《海のまちプロジェクト》に目を転じてみよう。前述のように須崎市では、海のまち須崎駅を含む中心市街地をコアゾーンと位置付けている。



ロゴスコープレーションが指定管理するロゴスパークシーサイド高知須崎は《海のまちプロジェクト》の拠点施設



取材時に実施されていたカヌースプリントナショナルチーム合宿の練習風景

ゾーンを形成するエントランス、シンボルロード、縁日商店街などの整備はほぼ完成形に近いが、飲食店が集まって集客力が高い縁日商店街の入り口に鎮座する「旧三浦邸」は、まさに往時の港町・須崎の繁栄を今に伝える存在といえる。かつては証券会社の店舗を兼ねていた入口がそのまま保存され、奥に広い邸宅内は現在、アートや地域文化などの展示施設、拠点施設として稼働している。

旧三浦邸前の縁日商店街を進むと、令和4年12月に開業し、地元食材を中心とする創作料理やスイーツ、雑貨などが人気のカフェ「須崎大漁堂」(元銀行の建物をリニュー

須崎市

(高知県)

市 政 ル ポ



大正時代中期に建設された「旧三浦邸（現すさきまちかどギャラリー）」は研究者の間でも高知県における商家建築の白眉と評価が高い

アル）の威容に出会う。

さらに進めば、縁日商店街のシンボル「縁日ひろば」と、須崎の海で採れた新鮮な魚介と料理を提供する「須崎のサカナ本舗」（令和5年11月開業に行き着く）。

「縁日商店街と、並行して堀川沿いに延びる川端シンボルロードは、『海のまちプロジェクト』における『須崎の既存の地域財産やポテンシャルの磨き上げを行い、現代的な要素や楽しみ、アートを加えたまちづくりを推進し、古き良きまち並みの復刻や心地よいまちへの進化を目指す』というイメージ・コンセプトを、まさに体現した『にぎわいゾーン』となります」（楠瀬市長）

こうして「にぎわい」を取り戻しつつあるコアゾーンの奥には、須崎市における「知と文化の拠点」とするべく建設が進む「海のまち図書館等複合施設」が令和9年に開館する。須崎市の『海のまちプロジェクト』の第1期計画はこれでいったん完成するが、にぎわい創造を通して実施されるはずの「次世代育成」と、持続可能な未来につながる「元気創造」への基盤構築は、そこからが本番だ。

また『海のまちプロジェクト』の始動と並行

して、須崎市は令和5年4月に「第3回脱炭素先行地域」に選定されており、同年5月に「ゼロカーボンシティ」宣言を行った。

脱炭素社会の構築は当然、良好な環境維持が前提の『海のまちプロジェクト』の推進と多角的に連動する。さらに、脱炭素社会の構築と密接に連動するSDGsへの取り組みに不可欠なのが、「誰も取り残さないまちづくり」の推進だ。それに付随する、全国的にも希少な取り組みを須崎市が実施したとのニュースが本稿準備中に届き、次のような楠瀬市長の談話も報じられた。

「人口減少が進む地方の地域活性化に向け、須崎市では女性が安心して暮らし、活躍できるまちづくりを目指しています。

その一環として、日本シングルマザー支援協会と連携協定を締結しました。今後は女性の活躍をさらに推進する取り組みを、多角的に強化していきたいと考えております」

それは「シングルマザー



魚介や野菜など須崎の食材をベースに創作料理やスイーツなどが楽しめる人気施設「須崎大漁堂」は元銀行の建物をリニューアル



須崎の魚介を存分に食べられる「須崎のサカナ本舗」と、隣接するイベントスペース「縁日ひろば」

や障害を持つ人、独居高齢者など、社会的な支援を必要とする人々が暮らしやすいまちこそが、真の意味で誰にも快適な生活の地になるはず」とする、楠瀬市長のかねてよりの持論を、実践に移す取り組みの一環としても注目される。

こうした複合的かつ同時多発的に推進される須崎市の地域振興施策・事業は全て、地域資源を十全に生かしつつ、隅々にまで目の行き届いた形で目指す市民の幸福、次世代育成、地域の元気創造の実現などを第一義とする『海のまちプロジェクト』に連動、包含されていくことだろう。コアゾーン完成後のさらなる展開が、今から楽しみだ。

（取材：文＝遠藤隆／取材日＝令和7年2月21日）